

◎今、高速道路を走っている、白山に向かって走っている。今年は、「くそつたれ コロナ禍のおかげ」思うように動けず、悶々としていた。と言えば、恰好はいいが、普段通りに過ごしていたよ。とはいえなんだか気持ちの奥底に、コロナ禍が潜んでいるのか、気持ちが晴れなかった。

◎夏ごろから白山に行きたいと思っていた、そんなこんなをだれかれに言っていたら、「24~29 休みを取ったよ」という連絡をいただき、渡りに船で計画を始めた。雨で順延になり、実行が今日ということでウキウキ車を運転している。番匠・林・上西・岡村の4人。林さんは別当出会で会うことになっている。

◎今朝、4時ころに目覚め、「ちょっと早いな」また布団に潜り込んで再度の目覚め、「15分前か まだちょっと早いが 起きよう」と歯磨きをしながら時計を見直して驚いた。「5:45 約束の時間じゃないか」慌て、「服を水を・・・」と車を出した。この一二年目覚めが早く、こんな寝坊は久しぶりだと嬉しい悲鳴、というのは、眠れる、寝坊するまで眠れる、これが身体にいい、これが最近のオレにはできない、ということなんですよ。

◎昨日の晩からあらかたの荷は積んでいた。60Lのザック、登山靴、車に置いておく風呂セット、カメラが入ったポシェット・・・。大慌てで家を出、近所で二人を乗せ、6時過ぎに茨木ICを出発。

◎茨木IC→京都東IC→湖西線 161号線 道の駅マキノ追坂峠で休憩→敦賀IC→福井北→勝山IC→勝山市内で昼飯用弁当を調達→白峰→別当出合い 駐車場で昼飯、先ほどの弁当。 こういう走り方をした。まっすぐ高速で行くのに比べ、高速代金が往復5000円弱の節約、反対に時間は15分ほど遅いということのようである。

◎12時 別当出合いの駐車場で昼飯を喰い登山靴に履き替えた。登山届を出し、橋を渡って出発。荷が重い。荷は少しでも軽くしようと頑張ったが、なかなか重い、時間とともにくいこんでくる。テントとシラフ、防寒具、食料などである。最初から所々に、転倒注意と大きく書かれている。大きな石の階段だ、こんなところで転倒すれば簡単な怪我ではすまない。

◎お陽さんが見える天気だが、山の向こうは霧が雲がかかっている、快晴ではないが晴れている。長そでと半そでのシャツを重ねているがこれで調度の暖かさ。あとからの話になるが、今回の山は二日間とも、雨に降られることもなく、寒さに震えることもなく、天候も最高でした。

◎小一時間で中飯場に到着、立派なコンクリート造りのトイレがある。昔、工事現場の飯場があったところかな、横に工事用舗装道路が伸びている。ここの谷筋は長いあいだ砂防工事が続いている、白山の砂防工事は、明治時代から始まり、いまだに日々続いているらしい。水が流れ崖が崩れる、いくつもの砂防ダム、巨大なコンクリートの壁、資材を運ぶヘリ・・・。コンクリートの壁が徐々に上がりつつある、人力と自然の競争のようだ。

◎3時に甚之助避難小屋を出発。先日来の計画で、この避難小屋を利用するのはいかがなものかな、ここでひとまず一泊すれば、上に行って帰れるのでは、という計画も考えてみた。今日は週日なのに、小屋の床にはシラフが並んでいる、みなさんすでに場所取りをされている、白山は人気の山だ、人が多い。そういえば先ほどから3時間ほど歩いただけだけれど、20人30人の方々とお会いしたように思う。天気は曇りであり、晴れであり、陽の光も見える。

◎フジアザミが咲いている、ここのは小さい。北沢峠で見たやつは大きかった。

◎荷が重い時は、30分ぐらいで休憩を取らないと、あとあと身体に伝える、これは今回の教訓。去年の槍の時も思ったが、荷を担ぐときは、30分で一本取らねば。相変わらず霞がかかっている。

◎4時ころに見晴らしのいい場所、分岐地点にやってきた。空気がひんやり透明になってきた。今までの霞があった先ほどまでに比べ、夕方の赤い陽の光が差し込み、空は青い、山の上のほうまで見えるようになってきた、大きな白山の形が右に左に見えだした。多少紅葉が来ているがまだまだ緑色、濃い緑と薄い緑、土や岩の黄色と茶色、白い幹をむき出した樹がまばらに、いやあ素晴らしい、うっとりするねえ。

◎南竜荘方面を見下ろすと、広々したところに建物が10棟ぐらい建っている。ネットで見た時点でも、あの建物群はなんだろうと不思議に思っていた。こんな高いところまでたくさんの人たちが上がってくるのか、足で歩いて、は一は一いいながら登ってくるのか、そんなことを考えながら近づいて行った。

◎南竜山荘のあたりは、竜の馬場（ばんば）という。山小屋は一番手前の三棟であった。その中の一棟が避難小屋のようだが、2階からの出入り口はない。甚之助避難小屋には、2階からの出入り口があった。テント場は先に進んで無人受付のようなことが書いてある。

◎テント場には炊事場の棟、便所棟、五六のケビン棟がある。なかなか立派な建物だと思ったが、ここは火山地帯の真ん中、シェルターも兼ね、コンクリートの頑丈な建物が必要なのもかもしれない。名前を書いて300円をボックスに入れた。水は豊富で、どこにでも水道蛇口があるのはありがたい。

◎だんだん夕方の雰囲気、広いテント場に10ほどのテントが張られている。山が低くなっている、西の方に太陽が沈み始め、そこにむくむく雲海が上がってきた。赤い夕陽と絡む白い、モノクロトーンの雲海はなかなか幻想的。雲海で一番感激したのは、剣御前で見た、川の流れのように谷筋を流れ落ちていく雲海は見事だった。中央アルプスの念文岳の雲海、これも評判通りに見事だった。

◎寒くなってきた、シャツ・タイツを重ね着、ダウンの上に雨具の上下、まだまだ九月なので、これで大丈夫だろう。飯の用意、傾いたベンチの上で、火をつけ鍋を煮始める。

◎白山は人が多い、今日でもこんなに多くの人がいるなら、これが祝祭日なら、十倍ぐらいの人出かもしれない、人気の山なんだ。しかも、オレより歳が上じゃないかと思えるような人が何人もいるのにはうれしくなるねえ。

◎ウイスキーをちびりいただき、作っていただいた食事を食べ、7時にはシラフに潜り込んだ。このちびりが、多少多かったのか、翌日のしんどさにつながった。

◎テント場が、竜の馬場（ばんば）、竜の大集合場所なんだ。上の方、室堂あたりも同じように馬場と呼んでもおかしくないような広々とした場所、白山の地形は不思議なくらいに広々とした地形が開けているのだと再発見。

◎夜露でテントが濡れている、上から降りてきて片付けようかとしていたら、工事の方が、「ヘリがコンクリートを運んでくるので撤収してくれ」慌てテントをたたみ、荷を作って、避難小屋にデポしていくことにした。

◎室堂に行く道は、4本ある。小屋の方が、「アルプス展望がきれい」ということでそれを登りだした。朝起きた当時は、白い霜が一面についていたが、晴れの天気、お陽さんが出てきて、木道の霜もさっと消えていった。

◎長い木道が終わり谷筋の横をなだらかに登っていく。疲れている、元気が出ない、昨日の歩荷がたたったか、ウイスキーを飲みすぎたか、足取りが重い。谷の水はキレイ、そのままストローでぐいぐい飲みたい、岩もキレイ、山々の景色もきれい、きれいづくしの中、歩くのは最高の気分である。

◎アルプス展望台というところに鉄板に山々の名が記されている。御岳山が大きく見える。爆発の何か月かあと、石徹白から別山に向かった時には、煙も見えた、今日は霞んでそこまでは見えない。

◎11時てっぺんにやってきた、人は多い、おまけに自衛隊の若者が訓練できている。若い人の中に、ジジババが混じっている。「ジジババはしんどいねえ」「私83歳登れてうれしい」「え83歳・・・」これが最後なんて言うてはおれない。白山は火山の山だ、横下には大きなへこみの池、爆裂の跡だ。400年前が最後らしい。

◎帰りは東から3番目の道、「エコーライン」を選んだ。石ゴロゴロ、次いで長い木道、最後に石畳、白山の整備には感心する。この最後の石畳には驚いた。どこかの造園やが、石をうまく組み合わせ巾に広い石畳風階段を作っている。広い草原、こんなに広い草原、景色の美しさには感激だ。曇ってきた、霧がわいてきた。

◎荷をデポしてある避難小屋に帰って、コーヒーを沸かし、菓子を喰って、さあいよいよ帰りましょうと歩き出した。霧が出て、視界が悪い。今日は晴れと思っていたが、山の天気急変は気まぐれである。

◎白山、いたく気に入りました、もう一度来たい、いい所だ。避難小屋が使えるなら、テントの重さが助かる、別当出会いへ車に入れるのはいつぐらいまでだろう、寒くなると道路の凍結も心配だ。

◎暗くなる少し前に車のところに帰ってきた。さあ、風呂だと走り出したが、白峰温泉は真っ暗で休んでいた。次の風呂へと走り出したが、なんとそこもまさかの真っ暗で休んでいた。「ええい今日は温泉なし」と叫んで高速に乗った。南条SAで簡単にラーメン、これぐらいなら眠くならない。帰って、荷ほどき、風呂、ビールにありついたのは12時ころだった。

服部敏良著<王朝貴族の病状診断>

◎藤原道長の一生は、政治的・社会的にみれば、御堂関白としての権勢並ぶものなく、一家三後の栄を誇って我が世の春を謳歌した、恵まれた生涯であったのだろう。しかし、医学的にみれば、糖尿病に侵されて身体は痩せ衰え、白内障のため視力は減退し、しかも度重なる胸病の発作に苦しめられ、最後は癱（はれもの）の苦痛に呻吟してこの世を去ったのであって、きわめてみじめな生涯であったと言わなければならない。もし救われたとすれば、彼がこうした苦しみの中に阿弥陀仏を観想し、念仏三昧に死を待ち、弥陀の手に引かれて極楽往生をとげたことであろう。

この世をば わが世とぞ思ふ、望月の 欠けたることの なしと思えば

◎御堂関白：藤原道長 62 歳で死亡：この歌は 53 歳の時に詠まれている。この歌から想像される道長は、いかにも堂々たる体躯を持ち、物質的にも精神的にも満ち足りた立派な人であったように思われる。矢野太郎氏の弁では、道長はおそらく相当骨格の逞しかった人であったように思われる。

小右記：しょうゆうき 右大臣という位の公卿 藤原実資（さねすけ）の日記。藤原道長・頼道親子の最も栄えた時代の政治・社会・儀式などを几帳面に広範囲に書かれ、当時の宮廷の実情を知る重要な資料。平安時代の日記の白眉とされている。その小右記の一部を紹介。

◎この歌が詠まれたころ：阿闍梨頼秀来る。密語していう。講説の間仏前に座せられ、中間必ず簾中に入り給う。若しくは飲水。紅顔減じて気力なし、慎（つつし）ませらるべきか、その期遠からざるか、余の思うところ、朝の柱石（柱とも礎とも頼む人）なり。尤（はなはだ）だ惜しむべし。

◎近日枯槁（ここう：草木が枯れることを転じて、衰えること）にはなはだし。去年より倍す。また一昨胸病発動す。悩み苦しむの間やや無力なり。

◎摂政車に乗り御行に従う。惱氣（のうけ）あるによって、河原より退帰せらる。飲水数々、暫らくも禁ずらざと云々。

◎この歌が詠まれたころ、道長は顔色も悪く、無気力な状態にあったものと思われる。

◎小右記：道長が言うには、口が乾き、昼夜の別なく水を飲むが、食事は減ることもないので医師たちは熱気のせいというが、自分は年来豆汁や大豆煎り、蘇密煎、訶梨勒丸等を常に服用しているためだろう、と語っている。しかし、他の人から見ると、顔色が悪く、ひどく憔悴し、疲れた様子から病気であることが間違いない、と記している。道長は茶を飲み、杏子をなめ、柿汁や葛の根などを服用し、多少乾きは薄れたようであった。世間の人々は、摂政ともあろうものが、葛は飢饉のときに下々の百姓どもが食べるものだと言った。

◎道長は、源氏物語の主人公光源氏のモデルとされているほど、健康で美青年だったと思われる。

◎道長は飲水病にかかっていた。今日の糖尿病である。

◎胸病：去夜胸病重く発す。已（すで）に存すべからず、いまなお堪えがたき者あり。小時にして退出す。今夜大殿北方を引率して法性寺に参らせらると云々。御胸いまだ平損せざるなり。

◎苦しみのあまり大声を上げ、その声は高く叫ぶがごとくであったという。

◎心臓神経症であろう。この病気は突然心臓が鼓動し、呼吸困難、苦悶感を伴い、死地に追いやられる不安感を持つが、多くは短時間に症状が薄らぐ。

◎先生いうには：このような病気は、自律神経のアンバランスに基づくもので、性格的には神経の過敏な神経質な性格の所有者に多く認められる。肉体的・精神的に過労の状況にあるとき起こりやすい。

服部敏良著<王朝貴族の病状診断>

◎新村拓:この先生があとがきを書いている。昔から人は、「病の器」と言われ、病は人が死ぬまでつきまといっている。本居宣長も、「そもそも人は 病ならで死ぬるは 百千の中に まれに一人二人」といっているが、現在でも死因のほとんどは病であり、その他の外因死の割合は7、8%に過ぎない。医療の進歩にかかわらず、病は一向に減る気配を見せず、年を追うごとに患者は増え、病名も数を増やしている。

◎新村拓:杉田玄白によって批判された漢医は、病を固定的、実体的に捉えず、体内を流れる気血の異常、時間とともに変化する徴候を症候群として把握するものである。それに対して玄白の蘭方医学・西洋医学の方は解剖知識を駆使して器質的な病変、実体として特定できる局所的な病因の追求に努めており、19世紀以降の急速な診断・検査技術の進歩によって、病名数を飛躍的に増加させた。WHOによると、14000項目数だそうだ。漢医を正統医学として認めていた前近代社会で用いられていた病名が、現代医学の何に相当するか、資料的な制約もあって固定はむつかしい。

◎新村拓:当時の病名の中で著者がもっとも解明に意を注いでいるのは、いろいろ解釈されている風病である。複雑な病としながらも、風病は現今の風邪をも包括した中枢性・末梢性神経系の病である。

◎中枢神経、末梢神経とは何か?WEB でしらべた。中枢神経は、<大脳・小脳・脳幹・脊髄>末梢神経は脳脊髄から出ているから出ている線維をいう。こんなことを聞くと、「ちょっと風邪ひいた」ではないねえ。

◎寸白すんぱく:貧血・浮腫・腹痛を伴う條虫症。これは小さい寄生虫じゃなく サナダムシのことだそうだ。

◎オレは、線虫、ミミズ系統の虫は苦手、見るも触るもいやだが、WEBの画像を見るとまさに身の毛がよだつ。ましてこんなに長いやつはとてもじゃないが正視に堪えない。生の肉や魚の中に入ららしい、寄生されてもわからないものがいて、尻から出てきて初めて気づくとか、やだねえ。

◎小右記の藤原実資(さねすけ):なんと89歳まで長生きしている。当時、藤原道長の全史時代で、道長に対抗しうるただ一人の公卿であった。藤原家に系統があり、実資は本来なら藤原家嫡流となるはずだったが、後宮に送り込んだ娘たちが皇子を産まなかったので、道長の九条流に政権は移っていった。

◎実資は有職故事に通じており、常に道理を重んじた。9歳上の実資と道長は、喧嘩あり円満ありの関係らしい。

◎平安時代公卿の死亡年齢

記録に残されている、300人近い公卿の死亡年齢は、50歳代死亡が一番多く、平均死亡年齢が60歳という長命だった。

◎執権・将軍

北条氏 の平均死亡年齢が46歳

室町将軍の平均死亡年齢が42歳

江戸将軍の平均死亡年齢が50歳

◎平安時代の貴族女性の平均死亡年齢が52歳。これは、早婚・妊娠・出産による肉体的・精神的悪影響によるものである。執権・将軍の寿命低下も、放埒な生活のもたらした結果、自らの命を自ら縮めた。近年、寿命が上昇してきたのは、乳幼児期の死亡が減少してきたからだ。乳幼児期を生き延びたものが、60歳以上の寿命を保ちえるのは、平安、鎌倉、室町、江戸時代と、同様である。

- ◎昼過ぎ、衣川さんの車に乗り、茨木 IC から琵琶湖に向かって出発した。一週間前の予定が雨天順延で今日になった。秋雨前線というやつがどうも曲者なのか、天気予報氏もスパコンピューターも頭をひねっている。
- ◎6月に行った、マキノの大谷山と同じコースでという希望だったが、体力不足なので石庭からの往復にした。
- ◎今回もGPSを持参したが、おかしいかな、地図があらわれない。数日前に地図をGPSに読み込ませたのが悪いのか、機械の機嫌が悪いのか、残念である。ただ今回のコースは迷うところもないので、紙の地図でじゅうぶんだった。最初の予定通りに、道のない所を登っていくのならば、「GPSさま様なんだ」と思っていた、登山道でないところはGPSが無いとまずいなと思っていた。もっとも、どこの山もそうなんだけど、里山の奥の山には人の跡がある、木を切った、炭を焼いた、獣を獲った、一升瓶が転がって、杣人が入っていたんだ。
- ◎「僕 車中泊」「岡村さん テント泊」「海津の公園で いかが」コロナ禍の中、マナーの悪いキャンパーのニュースが流れる。20,30年前は、昔は、どこでテントを張ろうと大目に見られたが、昨今、マナー違反には厳しい目が光る。じっくり琵琶湖周辺を観察すると、ごみや焚火跡があちこちに散乱している。よくないねえ。
- ◎衣川さんとはいくつもの山に登った。「そらあ 圧巻は 大嶺奥駆道だねえ」七日間、シラフ・食料・水を背負い歩いた。67歳の時だった。六日目、神社の横に一升瓶が置いてありカワラケにそっと入れ、幾杯も飲んだ。
- ◎いつものことだけれど、マキノ高原がこんなに琵琶湖に近いとは、地図の読めないオレである。
- ◎「オレ あの日は 緊張で 胸バクバク」「がはは オレねえ トラックのケツ ピッタリついて すんなり」これは先年、北海道からのフェリーが敦賀に着き、各々の車で帰宅した時の話。雨の中、161号線をとぼして帰ったことを思い出し二人で大笑い。帰る前日の北海道で、高槻・茨木あたりの大地震にも驚かされた。
- ◎海津大崎の有名な桜、昭和11年に植えられたそうで、百歳ぐらいかねえ。ちなみに、マキノのメタセコイヤは昭和56年に、2Mぐらいのものを植えたそう。持参の弁当を喰い、ウイスキーをちびり、早々に寝た。
- ◎昨晚も、今朝も、琵琶湖は静かだ。安曇川の家鳥センターを訪れたことがあったが、望遠鏡で見せてもらい解説してもらい、幾種類もの鳥をみた、ミサゴ君も見た。今は、サギ、トンビ、カラスはすぐにわかるが、あとはてんで区別がつかない。時々海面をバシャリと魚が跳ねるが、姿は見ずじまい。
- ◎マキノ高原のメタセコイヤの並木は近年いたく有名になってきた。オレが最初に見たのは、20年ぐらい前かな、山仲間と山に行く途中に立ち寄った。「お なかなかの 並木だな」と思ったが、ひとつこー人いなかった。今は平日でも、カメラを構えた人たちがうろうろしていて、車がすいすい走れない。
- ◎7:30:石庭の登山口から少し離れたところで車を止め、登り始めた。この付近はどこもかしこも鉄の網に囲まれている、移動するには鉄扉を開閉して進む。獣除けの網だ。
- ◎朽木の木地山に移住した老夫妻の話では、「シカもサルも 最初はかわいかった 写真も撮った」「今は にくき敵 庭も作物 無茶苦茶にしていく にくらしい」とおっしゃる。手塩にかけた作物が、いざ収穫の寸前に、食い荒らされてはかなわない。獣たちが、「ここは もともと おいらの陣地だぜ」なんていわれようと…。
- ◎歩いている、ジワリ汗。陽もあれば、薄暗い霧か霞が流れはつきりしない天気だが、雨が無いのは幸いだ。前回の白山、二日目には足が重かったが、今日は快調。重い荷の時は、30分で休むようにしよう。
- ◎山の中、樹々のかこまれ、風が流れる。この空間がいいんだね、人もいない、土と石がある、枯れ葉や枝が散らばっている、カエルが、トカゲが、鳥の声が聞こえる。精霊の響きなんて聞きたいがオレには届かない。
- ◎てっぺんが近づいた、すぐそこだ。木が生えていない丸いポコリンが見える。「あれれ 藪こぎならぬ ススキキこきだ」6月に来た時には青い草原だったのに、今は胸ぐらいの高さの枯れかけたススキ、道が見えない。
- ◎てっぺんでは若狭湾が見える、小浜の街が見える、反対側は霧に霞んで見えない、琵琶湖が見えない。
- ◎復路は石庭下山口から下る。この道、分岐までの間の顔がいい、表情がいい。若々しいブナ林、ほかの木もあるのだろうけれど、こちらの斜面、あちらの斜面に、競い合って立っている。涼しい風が吹き、霞がかかる。
- ◎山の上の方に、だだっ広い広場がある、この広場が好きだ。草が生え、樹も所々に生えている。陽がさすと草が揺れ波が立つ。イノシシやシカが駆けまわれそうな広場。こんなところでのテント泊は最高だろう。

上野誠著<万葉にみる男の裏切り・女の嫉妬> 和歌のお勉強だ。

◎まさかオレが万葉に興味をもつなんてと、我ながら苦笑する。先生の妙な切り口からこの本をまずはパラパラ、「あれれ 歌が無いじゃないの」面白おかしい話の解説があって、歌は本のうしろに載っている。「普通はまず 歌があって 面白おかしい話の解説 じゃないの」と笑ってしまったが、笑うほどに内容も面白い。ただ、いつも思うこと、「歌だけを見て 美しさが 面白さが 伝わってこない」という、体たらくなり。

●商返（あきかえ）し 許せとの御法（みのり） あらばこそ 我が下衣（したごろも） 返し賜はめ

◎万葉時代には、恋人や夫に、女性が身につけた下着を送る風習があった。普通に男女間で、愛しい男に、自分が身につけた下着を贈った。この歌は、別れが来て、男が（天皇）下着を送り返した。「身勝手に返してよいという法があるのならいいが そんな法は・・・」娘の恨み節らしい。

◎先生弁：へええ勝手に心変わりしておいて、何の断りもなしにプレゼントを送り返してくるなんて、恋愛のルール違反じゃないの。買った品物だって、不良品じゃなきゃ、勝手に売買契約解消なんてできないよ。だって、いきなりだからねえ・・・。

●さし焼かむ 小屋の醜屋（しこや）に

かき棄てむ 破（や）れ薦を敷きて

打ち折らむ 醜（しこ）の醜手を

さし交（か）へて 寝らむ君ゆえ

あかねさす 昼はしらみに

ぬばたまの 夜はすがらに

この床の ひしと鳴るまで 嘆きつるかも

返歌

我が心 焼くも我なり はしきやし 君に恋ふるも 我が心から

◎焼き払ってしまいたい。ぼろ小屋に捨て去ってやりたい。

破れ敷物しいて、へし折ってやりたい。

あの女の汚らしい不格好な手と、手と手を交じり合って、共寝しているんだろう、あなたのことを想う故、あかねさす、ひるはひねもす、<しらみ：虫ではなく、朝から夕まで> ぬばたまの、夜は夜もすがら、この床、ベッドが、ひしひしと鳴るまでに、私は悶え、嘆いてしまう。

返歌

私の心、それを焼き尽くすのも私の心から、あああ、どうしようもなく、

憎いあん畜生を恋しく思ってしまうのも、同じ私の心から。

◎異色の歌だそうだ。「恋敵の家を放火したい ぼろ小屋を」という叫び。次から次へ攻撃していく。そのあとに、寝室にいる君を歌う、性愛のイメージに導いていく。ベッド（当時、木製の四本足）で睦みあっている恋人と恋敵に思いをはせ、悶々とする自分を描いている。「床がひしと鳴る」というベッドのきしむ擬態語。

反歌

嫉妬に燃える自分を見つめる、もう一人の自分。激しく怒る自分を、見つめる自分。

◎こういう怒りの表し方は以後和歌の世界から消えていく。

◎先生、万葉集の授業風景の中で、この歌ほど生き生きと生徒たちが顔を上げ授業を受けてくれる歌は無いとおっしゃる。万葉時代の結婚生活は、一般に妻が夫の訪れを待ち続ける形態らしい。ところでこの結婚生活は、下々の家庭、労働者、農民、海や山の民も、同じような形態だったのかな。

上野誠著<万葉にみる男の裏切り・女の嫉妬> 和歌のお勉強だ。

- ◎歌垣：古代には、若い男女が胸をときめかせて待つ熱い夜があった。それが歌垣の夜である。時と場所を定め、男女が集い、互いに歌を掛け合って、恋人を見つける。その夜だけは男女が自由に共寝をすることが許された。歌を掛け合いながら、互いの気持ちを探り合い、相手を見つけるというルールである。
- ◎これらの歌の作者は、公卿やら上級役人ではなく、地方の農民のようなにおいがする。当時の一般人が、字の読み書きができ、和歌が詠めたのかな、それとも、今のラップのようなものかな。一般人の識字率が高かったのか、歌の作者は一般人の中の選ばれた人たちだったのか、こんな庶民のことが知りたいね。

●男神（ひこがみ）に 雲たち登り しぐれ降り 濡れ通るとも 我帰らめや

◎相手が見つからないうえに雨まで降ってきた、踏んだり蹴ったりだ。でも、俺は、帰らず相手を見つけるぞ。

●打つ田には 稗はしあまた ありと言えど 選（え）られし我ぞ 夜ひとり寝る

◎耕された田にも、引き抜かれずに残った稗は、たくさんあるというのに。よりによって稗みたいに引き抜かれた俺様は、なんと、ひとりで寝るはめに・・・。

◎田んぼに稗が生える。繁殖力の旺盛な稗は、稲作の大敵なので、稗や雑草を刈る、田の草取りをする。ほかの奴らは、彼女を見つけたのに、オレは引き抜かれた稗のように独りぼっち。

◎宴：折口信夫：日本人にとっての神とは、日本人は神を遠来からやってくる尊い客と見ているのではないか。日本の祭りが神を迎えるところからはじまり、次に神を接待し、最後に神を送るという構造を持っているという。神が帰ると、人々はその労をねぎらいために、宴を開くのである。三本締めのように手を打って挙げる、これが、「打ち上げ」という動作、この言葉が縮まって、「うたげ」と言われている。尊い客を迎え緊張の時間が続き、「尊い客が来てくれることは嬉しいが あまり長くいられると 息がつまってしまう 帰っていただくと ホットする」帰ってもらうのも、また嬉しい、そんな緊張から解放されての宴であった。

◎おいしいお酒と料理、楽しい歌や舞い、その場を彩る美男美女、神様が帰ると、たっぷり残ったごちそうで、「あとのまつり」をいただく。祭りが度重なると、酒・料理・歌・舞が洗練され、茶道・華道・香道も神仏をもてなし、客をもてなすなどと洗練されていった。

◎うたげの集まりでは、歌は即興性と意外性、その場の雰囲気をつかむ、そういう能力が試された。

●一二の目 のみにはあらず 五六三 四さえありけり 双六の頭（さえ）

◎正倉院御物に双六があり、奈良時代にも宴会での双六ゲームがあったらしい。一二の目だけではございません、五六三 四さえございますぞ。さいころの目というやつは。

●萩の花 尾花葛花 なでしこの花 おみなえし また 藤袴朝顔の花

◎山上憶良の歌。憶良は、秋の野花は七種類あります、と歌う。無冠から遣唐使にまでなった秀才の憶良も、みな期待に反して、ただ、花の名前を並べただけである。

●香塗れる 塔（たふ）にな寄りそ 川隅（くま）の屎（くそ）鮎食（は）める いたき女奴

◎香・塔（寺院の塔）・厠・屎・鮎・奴（売買された召使）の六つの言葉を入れて歌をつくれ、と・・・。

◎香を塗った、塔には夜でないぞ。川の曲がり角の屎で育った鮎を喰っている。ひどい女の召使よ。

●めづらしき 君を見とこそ 左手の 弓取る方（かた）の 眉根搔（か）きつれ

◎ご無沙汰つづきの、愛しいあなたに合わせろ・・・！と、弓を持つ側の左の眉を搔いたのに・・・あなたはこない。蜘蛛の動きが激しいと、くしゃみが出ると、眉がかゆくなると、彼がやってくる、という俗信があった。

上野誠著<万葉にみる男の裏切り・女の嫉妬> 和歌のお勉強だ。

◎和歌はわからない、その感性、その言いまわし、言葉そのものがわからない、オレには、面白さが伝わってこないと思っている。ただ、万葉集のいくつかの解説書を読み、当時の人の暮らしを知る、人の考えを知る、これならわかる、民俗学の話、人々の暮らし、これなら面白く読めると思いなおした。

●君が行き 日長くなりぬ 山尋ね 迎えか行かむ 待ちにか待たむ

◎あなたが旅に出て、久しい時が過ぎました。山に尋ねて迎えに行きましようか、それともずっと待ち続けましようか。磐姫皇后が仁徳天皇を恋い慕って詠んだ歌。嫉妬深いということは、好きで好きでの裏返しなのだ。

◎記紀の神話に載っている歌が万葉集にもあるのだとは知らなかった。仁徳天皇の話はにぎにぎしく記紀に載っている。実在の人物なのか、神話の話なのか、わからないが仁徳天皇の妻の歌が記紀に載っている。古代からの口承なのか、記紀の編集者の創作なのか、わからないが、ま、いいじゃないですか。

◎仁徳天皇伝は、彼が施した善政と、皇后磐姫の嫉妬の物語からなる。40 前半に強大な勢力を持った、葛城山の麓にいた葛城氏の娘であった。

◎古事記：仁徳天皇の太后である磐姫の命は、嫉妬することがはなはだしく多かった。そんなわけで、天皇の他の妻たちは（当時は多妻、位が高い順に、皇后・妃・夫人・嬪）宮中に近づくことさえできなかった。他の女のことと言葉の端にのぼろうものなら、足をバタバタさせて嫉妬した。

◎古事記：天皇の寵愛を受けたクロヒメは吉備国：岡山から召されたが、皇后の嫉妬を恐れ、海路吉備へ逃げ帰ろうとするが、皇后は船を奪い取ってしまう。クロヒメは歩いて吉備まで逃げ帰った。

◎日本書記：天皇は宮に仕えていたクワタノクガヒメを妻のひとりとして宮廷に迎えたい。しかし皇后の嫉妬を恐れた天皇は泣く泣く別の男性に譲ることにしたが、ヒメは天皇と添いとげられないならと、死んでしまう。

◎日本書記の最大のスターは聖徳太子。推古天皇の摂政となり、仏教の理想によって、日本の心を一つにしよとした人。四天王寺をはじめ様々な仏教寺院の建立。十七条の憲法の制定。遣隋使の派遣。日本書記と万葉集が成立した8世紀前半の人々は、神や英雄のように崇拝していた。オレも学校でそう教えられてきていた。

◎ところが、聖徳太子のことを調べていくと、どこまでが史実でどこからが後世の伝承か、一つ一つ引き算していくと、聖徳太子の存在否定説、聖徳太子はいなかったのではというところになっていく。

◎先生の考え：日本書記や万葉集に出てくる像は後世の伝承だが、聖徳太子は存在したのではと思う。

◎古事記・日本書記・万葉集は8世紀にできた書物だが、聖徳太子が活躍したのはその百年前のこと。

●家ならば 妹が手まかむ 草枕 旅に臥（こ）やせる この旅人あはれ 万葉集

◎行き倒れて死んだ人を見て、家にいたなら、妻の手枕で寝ていたろうに、旅先で倒れた、この旅人は哀れだ。

◎同じ話が、日本書記に載っている。聖徳太子は片岡（奈良県北葛城あたり）というところにお出かけになった。飢えた人が道端に臥せていた。太子はその人に生命を尋ねた。次に飲み物と食べ物を与えた。次に服を脱いでその人にかけてやり、気を安らかに寝ていてくださいと、歌った。

◎姓名を尋ね、食事を与え、衣服を与え、歌を与える。心と体の飢えをいやすことが、奈良時代の天皇が希求した政治の理想であり、聖の徳を与えることが政治の理想であったのでは。

◎孝謙天皇の勅：諸国から庸と調の税金を納めにやってくる脚夫が、仕事を終え故郷に帰るとき、道は長く食料は底をついてしまう。旅先で病気になっても世話する人もいない。そこで平城京や諸国の役人に対し、食料や医薬品を分かち与えよ。労をいとわず道中で苦しむ人を故郷にたどり着けるようにせよ。

◎先生：日本人は、「豊の上で死ぬ」が最高の理想。骨になっても故郷に帰りたいというのが理想。海外の留学生がなぜと不思議がるが、先の戦争の、海外の戦死者の遺骨を何十年かけても戻してあげたいのが日本人なのだ。



上野誠著<万葉にみる男の裏切り・女の嫉妬> 和歌のお勉強だ。

◎小川靖彦：万葉集は、ある一時期に、少数の編集によって統一的に編まれた歌集ではありません。増補に増補を繰り返して二十巻に成長しました。明確な意図と構想のもと強い編集力を駆使して短期間に編まれた、「古今和歌集」に比べ、その輪郭はあいまいです。そのゆるやかさが、万葉集の魅力です。

●ひむがしの のにかげろひの たつみえて かえりみすれば つきかたぶきぬ 柿本人麻呂

●東野炎立所見而反見為者月西渡 これが当時の原文。

◎全体の文脈から予想できる助詞・助動詞や動詞の活用語尾を文字にしなくてもよいのがくちとむつかしいね>、万葉集の、「やまと歌」の書き方でした。

◎柿本人麻呂の奈良時代の日本語と、平安時代の日本語まで、すでに音韻・文法・語彙が異なっています。中世・江戸・近現代に進むにつれその差はますます開いていきます。

◎あずまのの けぶりのたてる ところみて かえりみすれば つきかたぶきぬ 平安時代後期の読み方。

◎現在の読み方は、江戸時代の賀茂真淵の案。暁に東をはるかに見やると、明るくなった光がゆらめき、また西を振り返ってみると、落ちた月がある、というのである。たいへん広い野に旅寝をした暁の様子を思いめぐらしてみなさい。<これが本当たと思っていた。真淵先生の創作ではないの・・・？>

◎歌ができた当時の、奈良時代の歌の読み方がわかれば言うことはないのだが、本当に知りたいねえ。

◎防人の歌が気になる。防人とは警備員なのか、戦闘員なのか、あまり強そうには見えない。全国各地から集められ、任期は3年だが、延長もあったそうだ。不思議なのはすべて自腹でやれということ、組織や体制が面倒をみないとはいなんだろうね。「食料・交通費・装備は勝手にそろえろ 防人に出ても免税の措置はないぞ」

●難波津に 装（よそ）い装いて 今日に日や 出でて罷（まか）らん 見る母なしに

◎丸子連多麻呂：神奈川県の人。いよいよ今日、この難波津より完全武装して出航します。装う：を繰り返すことで、やっとの思いで武器や鎧を手に入れたことを強調しているのかも。

●我が妻に いたく恋いらし 飲む水に 影（かご）さえ見えて よに忘れられず

◎若倭部身麻呂（わかやまとべのみまろ）浜松のひと。離れ離れの妻が恋しく、水飲むときに映る自分の顔さえ、妻に見え、どうして忘れられようか。

●父母が 頭搔き撫で 幸（さ）くあれて 言いし言葉（けとば）ぜ 忘れかねつる

◎文部稲麻呂（はせつかべのいなまろ）：父さん母さんが、子どものころのように、頭をくしゃくしゃしながら、「元気で帰って来いよ」と言ってくれたことが忘れられない。

●吾等（わろ）旅は 旅と思（おめ）ほと 家にして 子持ち瘦すらむ わか妻かなしも

◎玉造部広目 家に残した妻が子供をだいて瘦せていく姿を思い浮かべ、妻へのいとおしさを歌っている。

◎防人とは九州沿岸の防備に当たった兵士のこと。663年、白村江の戦いに敗れ、九州北部の防衛強化が必要とされた。701年には大宝律令で、勤務は3年、在任中は課役が免除され、勤務終了後、軍への勤務が3年免除された。おもに東国の兵士が多く、難波まで自弁で赴き、難波で各国の防人と集結して筑紫に派遣された。

◎防人を掌握していた、大伴家持に提出された166首から84首が万葉集に収められている。

◎防人制度は750年ころにいったん中止されるが、790年ごろから、8世紀後半ぐらいまで、蝦夷（東北）制圧に東国の負担が強いられた。